

「現地を訪問して想うこと」

1968年卒 理工学部 岡田 茜

空間放射線量率、マイクロシーベルト毎時、積算放射線量、アルファ線、ベータ線、ガンマ線、外部被ばく、内部被ばく、A) 避難指示解除準備区域、B) 居住制限区域、C) 帰還困難区域。



「なみえ復興レポート」浪江町発行より

これまで報道されていて、見聞きしていたはずのこれらの言葉は一向に理解できていませんでした。どういう数字、場所が安全なのか、どこが危険なのか何も分かっていませんでした。

この研修旅行から帰ってから、地面から1mくらいの高さの空間線量計で測って1マイクロシーベルト毎時くらいが確実な安全を見込める限界とされていることを知り、A区域にある、日曜日にもかかわらず見学を受け入れて下さった浪江町役場の付近の空間放射線量は、およそ0.1マイクロシーベルト毎時であって、安全な空気の中にあることをはっきり理解することができました。

浪江町に向かうバスの中では瞬間でしたが放射線カウンターが42マイクロシーベルトを表示して驚きました。“現地にいるのだ”を実感しました。

バスから見える無人の家々は、震災からこっち修繕できないまま瓦が波を打ち、落ちている家が多数です。新築らしいたずまいの家もちらほら見えます。同じように商店、料理

屋があります。本当に時が止まっています。家々には「とうせんぼ」が設けてあり入れない状態です。田んぼであったと思われるところには除染された黒色の袋に詰められた廃棄物が積み上げられているところが沢山目につき、街中には各自の庭に黒色の袋がおかれています。「このような状態なのに原発の再稼働するってよく言うなあ」と言われた福島県校友の言葉が印象的です。警察官がパトカーと共に立ち入りをしないように検問をしています。地震と被ばくの二重の被害があったことを実感しました。そして4年8ヶ月の時間は人々を助けてはいないと思いました。

その上、「福島県」と名の付いた農産物はそれだけで敬遠される、また、どうしても価格が他県より低いなど風評被害にあっているとも伺いました。

校友である福島放送報道キャップの宮川さんが持参して下さった震災関連番組CDを視聴した中に、福島県内で一度は米を作った農家がありました。米の線量は低く、安全でおいしく嬉しく味わったにも拘らず次の年にはお米づくりを諦めざるを得なかったとのことでした。作っても買ってもらえないからです。そこで広い田んぼに菜の花の種を蒔きました。種から菜種油を精製しようとの試みです。何より良いことは油は放射線の影響を受けないのです。今年に入ってから立派な菜種油の瓶詰めが製品として完成し、新しい福島の産品として売り出されようとしています。製油所探しにもご苦労はあって、少し離れた郡山市にやっと理解者がいてくれて精製にこぎつけたという嬉しいお話がありました。これからの農業はこういった放射線に左右されることのない作物を探すことが一方法だと思いました。

いわき市の”トマト工場”「あかい菜園」(福島県いわき市平赤井字日渡 104・2)も見学させていただきました。いわき市は福島原発から大体30km以上離れていて全市上掲のA)地域です。放射能の影響はほとんどないに等しいですがやはり「福島県」の風評被害があると所長の船生さんは言います。

平成21年からトマトの生産を開始。順調だった生産も平成23年3月の震災の日1haのビニールハウスのトマトの苗が将棋倒し、バラバラバラと倒れ、一時とまったといいます。それが今では耕作用のビニールハウスも増築され、管理された栽培施設を持ち、本場オランダから輸入した管理システムを使って、高品質なカラフル、種類もいろいろなトマトを生産。その上、いつまでもオランダに頼ってばかりではいけないと独自のソフトも、開発、販売されています。“彩りトマトの詰め合わせ”は可愛くて、色が美しくて女心をくすぐられます。風評被害に立ち向かって努力しておられる企業が小さいながらもがんばっておられるのを見ることができて嬉しい気持ちでした。



1ha の広さのビニールハウスのトマトの様子



彩りトマトの詰め合わせ

宮城県名取市の「ささかまと海鮮珍味」の“ささ圭”の社長とは昨年、岡山市で開催された全国校友会の二次会で偶然お知り合いになりました。津波で倒壊したお店を再開し、おいしい蒲鉾を製造されているご様子もこのツアーでお伺いし、大変嬉しく感じました。缶詰の“木の屋石巻水産”も校友の会社で、震災後も珍しい缶詰を生産されて独自性を発揮し取り組まれているとのことでした。校友の会社だけでなく、福島県の産物を意識して購入していきたいと思いました。浪江町のお酒“親父の小言”と B 級グルメでグランプリをとった“焼きそば”を注文、後程届けていただきました。さすが東北、辛口で久しぶりにとってもおいしい日本酒でした。

この他にも感銘を受けたのは、いわき市にある「ホテルハワイアンズ」でお聞きした震災時のホテルが担った避難所としての役割や、またフラガールのこと、もう一本の福島放送のビデオで知った相馬市の高橋亮平医師のこと、この方は震災後も産婦人科の医師だけれどずっと相馬市に残り、全科の診療をされたこと、ご自身が癌におかされても治療を受けながら診療されたことなどいろいろ見聞きしたことを周りのみんなに伝えていきたいと思えます。

このような現地の深いところを肌で感じられるツアーを計画していただいたのは本当に有意義だと思います。良い経験をさせていただきました。有難うございました。